

〈相手を評価する発話〉についての一考察：日本語の 「ほめ」と「けなし」をめぐって

山路，奈保子
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494605>

出版情報：比較社会文化研究. 17, pp.109-115, 2005-03-15. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：



＜相手を評価する発話＞についての一考察

—日本語の「ほめ」と「けなし」をめぐって—

ヤマ ジョ ナ オ コ
山 路 奈 保 子

1. はじめに

「ほめ」は、人間関係を良好に保つための言語行動のひとつとして、さまざまな観点・方法での研究が行われている。しかし、それらの研究は、ほめの定義が明確にされないまま(主観的な捉え方で)、あるいは形式上の定義のみで行われてきた。しかし、形式が同一のほめでも、相手を快くさせることも不快にさせることもあり、それが意図的に行われる場合と意図せずにそのような結果を生む場合がある。また、ほめに期待される「潤滑油」としての効果は、人間関係によっては「ほめ」よりも「けなし」のほうが強力である場合もある。さらには、形式上は肯定的評価でありながら、実際には否定的評価を伝えている(＝皮肉)場合もあれば、その逆のパターンも存在する。

そこで、本稿では、「ほめ」とその対極である「けなし」を＜相手を評価する発話＞とし、「発話意図」と「伝達内容」と「発話内容(形式)」の3つの軸で整理することにより、ほめとそれに隣接する言語行動との関係を捉えなおすを試みる。

本稿で用いる談話例は、日本語で書かれた小説から採取したものである。小説中の談話は、必ずしも現実のコミュニケーションを正確に写し取ったものではないが、一方で、ある状況でどのようなことを言えばどのような効果が期待できるかという、その社会に属する者が共通して持つ概念がそこに強く反映されていると考えられる。本研究の目的は、「ほめ」やそれに隣接する言語行動を数量的に正確に捉えることよりも、日本語を母語とし、日本社会に属して生活する人々が、どのような効果を期待して「ほめ」や「けなし」を行っているのかを観察することにあり、小説は観察対象として最も適したものであるといえる。

2. ＜相手を評価する発話＞の分類

ほめの研究においてその定義が行われている場合、多くは Holmes(1988)による以下の定義を基本にしている。

A compliment is a speech act which explicitly or implicitly attributes credit to someone other than

the speaker, usually the person addressed, for some 'good' (possession, characteristic, skill, etc.) which is positively valued by the speaker and the hearer.

この定義は、ほめを形式面から規定したものと言えるであろう。しかし、この定義に該当するものであっても、誰もが「ほめ」であると考えようなほめ、すなわち「典型的なほめ」とは異なる種類の言語行動が存在する。Holmes (1995) は、以下のような例を引いて、ほめが verbal harassment として機能することを指摘している。

Man on building site to young woman passing by.

Wow what legs. What are you doing with them tonight sweetie?

このようなほめは、上の定義に反するものではない。また、発話者と聞き手の人間関係や文脈によっては、典型的なほめでもありうる。それでも、多くの人は、上の例を直感的に verbal harassment であると判断するであろう。しかし、形式上は、典型的なほめと verbal harassment を区別する根拠は存在しない。

この例が verbal harassment であるとするならば、それが典型的なほめと異なるのは、発話者がどのような効果を期待して発話を行ったか、また、聞き手がそれをどのように解釈したかという点である。典型的なほめは、聞き手がそれを聞いて喜ぶ＝聞き手の心理にプラス方向に影響を与えることを期待して行われる。verbal harassment は、聞き手がそれを聞いて不快に思う＝聞き手の心理にマイナス方向に影響を与えることを期待するものである。

一方、下の例1では、形式の上では上述の定義に当てはまらない発話を、聞き手はほめとして受け取っている。

[1] (女性刑事の「彼女」が、被害者の「おれ」の家を訪ねてきた)

グレーのスーツの下から伸びるふくらはぎが、微妙にゆれつつ、狭い玄関が上がってくる。きれいな脚をしていると、変な意味でなく見とれた。

彼女がおれの視線に気付いた。目をそらしたりす

るのが嫌で、そのまま脚を見ていた。

「何見てんの」

「折れねえのかよ、脚」

「え…」

「そんなに細くて。刑事ってのは走ったり飛んだりするんだろ、よく折れねえな」

「嬉しい、脚をほめられるのなんて滅多にないの」

「べつにほめたわけじゃねえよ」

(天童荒太「孤独の声」)

話し手は「きれいな脚をしている」と思っても、その通りに述べることはせず、「折れねえのかよ」と、あたかもマイナスに評価しているような形式を用いている。この場合で、「きれいな脚をしている」と言えば、それは前述の verbal harassment の例と同じような効果を持つ可能性があるが、ここでは逆の形式を用いることで、聞き手の心理にプラス方向に影響を与えるという、逆の効果を得ているのである。

このように、ほめをその効果の面から考えると、形式面だけの定義ではとらえきれない部分が出てくる。

そこで、本研究では、まず、典型的なほめについて、以下のように考える。

- 典型的なほめ：①聞き手の心理にプラス方向に影響を与えることを期待して、 [発話意図]
 ②聞き手に属する<何か>について肯定的な評価を伝えようとして、 [伝達内容]
 ③肯定的な評価を述べ、 [発話内容]
 ④聞き手の心理がプラス方向に動く [実際の効果]

このように考えると、上に述べた verbal harassment とは、①と④がマイナス方向に変わったものであり、また例1のような発話は、③の [発話内容] のみがマイナスに変わったものであるとみなすことができる。

次に、ほめとその周辺の言語行動を①～③の3つの軸によって分類する。④の実際の効果は、話し手によるコントロールができないので、ここでは話し手側の期待のみによって分類する。

分類のしかたは、下表に示すとおりである。

[表1]

	発話意図 ：発話によって期待する効果	伝達内容 ：伝えようとしている真の意味	発話内容 ：文字通りの意味	実際の効果 ：聞き手による解釈
A	+	+	+(0)	+/-
B	+	+	-	+/-
C	+	-	+	+/-
D	+	-	-	+/-
E	-	+	+	+/-
F	-	+	-	+/-
G	-	-	+	+/-
H	-	-	-	+/-

A：親和的意図による明示的肯定的評価

A'：親和的意図による暗示的肯定的評価

(発話内容=0の場合)

B：親和的意図による、否定的評価を装った肯定的評価

C：親和的意図による、肯定的評価を装った否定的評価

D：親和的意図による否定的評価

E：攻撃的意図による肯定的評価

F：攻撃的意図による、否定的評価を装った肯定的評価

(*存在せず)

G：攻撃的意図による、肯定的評価を装った否定的評価

H：攻撃的意図による否定的評価^{*)}

AからDまでは、形式や伝達意図は異なっている点では共通である。例えば、親しい友人の部屋を訪れて、その部屋について何か感想を述べるとすると、

A：きれいな部屋を目の前にして「きれいな部屋」と言う。

B：きれいな部屋を目の前にして「きれいすぎて落ち着かない」などと言う。

C：汚い部屋を目の前にして「きれいな部屋だよ、まったく」などと言う。

D：汚い部屋を目の前にして「きったないなあ」などと言う。

といった場合が考えられる。

C、Dは「部屋が汚い」とけなしているのであるが、このような「けなし」は、例えば Leech(1983)が「丁寧さの不足は本質的に親密性のしるしとなりうるものであり、またそれゆえ、冗談で人に失礼に振舞うことができる」ということは、そうした親密な関係を打ちたて維持するのに役立つことになる」と述べているように、それが可能なほど親し

^{*)} 因(2005)は、話者の意図の方向性を大きく「親和的」「攻撃的」に二分している。本稿もこれを踏襲し、「親和」「攻撃」の文字通りの解釈に必ずしも当たらない発話をも含むラベルとして用いる。

い関係であることの表明である。

A'は評価を直接的には表現せずに肯定的評価を伝えるものである。

EからHまでは、相手の心理にマイナス方向に影響を与えようとするものである。伝達意図や形式の面では、E=A、F=B、G=C、H=Dであり、それぞれ表面上は区別がない。例えば、Aとまったく同じ発話でも、これが＜遺産を独り占めにして家を新築した兄弟の家に押しかけての発話＞であったとしたら、Eの可能性が生じるであろう。同じく、C、Dも、＜掃除をしない嫁に憎悪を抱いている姑＞の発話であれば、G、Hであるとも考えられる。Fのようなパターンは通常では考えにくい。

この分類は、ほめとその周辺の言語行動を整理する上で便宜的に行うものにすぎない。実際の発話では、いずれの軸も完全にプラス、完全にマイナスというようにきれいに分かれるものではなく、ほとんどが中間的であるか、あるいは両義的であると考えられる。たとえば、上司が部下の行為を厳しく非難したような場合、上司がどのような期待をもってそのように述べたかということは、マイナス／プラスのみで説明できるものではない。

しかし、このように図式的に整理することによって、相手を評価する発話が、互いにどのような位置関係にあるかをより明確にすることができると考えられる。

以下、A～Hそれぞれについて、小説中の談話例によって具体的に示し、詳しい分析を行っていく。

3. ＜相手を評価する発話＞の談話例

3-1 親和的意図による明示的肯定的評価

発話意図、伝達内容、発話内容とも（+）で、ストレートなほめ、典型的なほめととらえることができる。

- ①聞き手の心理にプラス方向に影響を与えることを期待して、[発話意図=+]
- ②聞き手に属する＜何か＞について肯定的な評価を伝えようとして、[伝達内容=+]
- ③肯定的な評価を述べる[発話内容=+]

[2] (婦人服売売場のニットドレスの前にぼんやり立っていた「康子」に、店員が声をかける)

「すてきでしょう、それ。よかったら着てみませんか。お似合いになりますよ。お客さま、お若いのにとても気品のあるお顔立ちしてらっしゃるから」

不意に中年の店員が声をかけてきた。康子は腫れぼったくなった臉をこすって、顔を上げた。地味を「気品がある」と言いかえたプロの接客術に、

救われた気分になった。言われるままに、フィッティングルームに行き、ニットドレスの袖に手を通す。

「ま、なんてすてき」

カーテンを開けたとたん、店員が言った。お世辞とは思えなかった。

(篠田節子「女たちのジハード」)

3-2 親和的意図による暗示的肯定的評価 (A')

表1において、(A)の「親和的意図による明示的肯定的評価」の「発話内容」の欄に(0)と示したのは、効果や意図の点では(A)と同じであっても、発話の中で直接的に評価を表現していない場合、すなわち発話内容が(+)でも(ー)でもない場合が存在することを表す。(A)がストレートなほめであるのに対して、これは「暗示的なほめ」である。

- ①聞き手の心理にプラス方向に影響を与えることを期待して、[発話意図=+]
- ②聞き手に属する＜何か＞について肯定的な評価を伝えようとして、[伝達内容=+]
- ③評価を直接表現せず、事実や感想だけを述べる[発話内容=0]

[3] (「野地」は老刑事。「ウラ」は若い刑事。「小林」は自分の子供を人質に公衆便所に籠城した犯人。「小林」が「野地」の説得にほだされて泣き出した後、自殺を図った。)

「体が動かんかった…」

小林を乗せた救急車が走り去ると、野地がくやしげにつぶやいた。

「かわりに口が動いてました。俺だったら途中でぶん殴っていたかもしれません。そうなったら、奴の罪が余分に増えた」

ウラはいった。かたわらのパトカーでは、公衆便所から連れ出した子供が、母親の腰にしがみついていた。怪我はまったくない。

(大沢在昌「らんぼう」)

例3の「ウラ」の発話には、聞き手の「野地」を直接的に評価する言葉はみられない。「自分だったらそのようにはできなくて失敗したはず」という感想を述べることによって、「あなたの説得はすばらしかった」という肯定的評価を間接的に伝えているのである。

3-3 親和的意図による、否定的評価を装った肯定的評価 (B)

2章に挙げた例1は、このタイプの一例である。形式の上では「けなし」であるが、実際にはほめているというパターンである。

- ①聞き手の心理にプラス方向に影響を与えることを期待して、 [発話意図=+]
- ②聞き手に属する<何か>について肯定的な評価を伝えようとして、 [伝達内容=+]
- ③否定的な評価を述べる [発話内容=-]

このタイプの典型的な例を下に示す。時代物の小説中の子供同士の会話であるが、肯定的評価のこのような伝え方は、時代物だからというものではなく、現代でも十分ありうるものである。

[4] (「おさき」は目の不自由な娘、「龍之介」は、「おさき」を預かっている家の息子で、ともに10歳前後。「不破」は「龍之介」の父である。「おさき」が「龍之介」に竹とんぼの飛ばし方を教わり、悪戦苦闘の後ようやく飛ばすことができ、ほめられている場面)

「おさき、塀の外に飛んでいったじゃないか。全く…」

龍之介が初めて不服を漏らした。それは龍之介流のおさきに対する褒め言葉であったが、不破には通じなかったらしい。

「たかが竹とんぼ一つに何だ！」

不破の大音声が響いた。龍之介は首を竦めて慌てて塀の外に走った。(宇江佐真理「さらば深川」)

このタイプの特徴は、例1では「足が細い」、例4では「竹とんぼを遠くまで飛ばした」という、それ自体はプラス評価できる点に言及しつつも、発話内容自体は、そのプラス点ゆえに生じる不都合を述べているという点である。

3-4 親和的意図による、肯定的評価を装った否定的評価 (C)

(B)とは逆に、否定的評価を伝えるのに、その逆の肯定的評価を述べるというものである。皮肉でほめているのであり、実際には「けなし」であるが、次に述べる「親和的意図による否定的評価」(D)と同様、けなすことが親しさの表明となっている。

- ①聞き手の心理にプラス方向に影響を与えることを期待して、 [発話意図=+]
- ②聞き手に属する<何か>について否定的な評価を伝え

- ようとして、 [伝達内容=-]
- ③肯定的な評価を述べる [発話内容=+]

このタイプの発話は、小説中にはあまり例を見つけることができなかった。下の例5は、典型的な例とはいいがたいが、先行する聞き手の発話を話し手がプラスに評価しているとは考えられないので、伝達意図はマイナスとみなすことができる。全体として、上からの命令に憤っている聞き手を「茶化す」意図での発話であると考えられるので、このタイプの一例として挙げる。

[5] (「ウラ」と「イケ」は刑事。強盗事件の張り込み中。犯人は言葉を発しなかったため外国人と見られ、2人は外国人の集まる公園で張り込みをさせられている)

「まったく馬鹿じゃねえのか。言葉喋んねえほし全部外国人だつうなら、俺らでも強盗やるぜ」

ウラは吐き出した。

「おう、そりゃいい考えだ。お前くらいでかかったら、誰も日本人だなんて思やしねえよ」

イケはいって、よいしょと公園におかれた土管の中に入り込んだ。(大沢在昌「らんぼう」)

3-5 親和的意図による否定的評価 (D)

(C)とは異なり、皮肉ではないストレートなけなしであるが、期待している効果は(C)と同様、親しさの表明である。

- ①聞き手の心理にプラス方向に影響を与えることを期待して、 [発話意図=+]
- ②聞き手に属する<何か>について否定的な評価を伝えようとして、 [伝達内容=-]
- ③否定的な評価を述べる [発話内容=-]

[6] (主人公は大学の寮に住む学生。寮の厨房係の女性との会話)

朝食にも出た豆腐となめこの味噌汁。そして麦が三割入った御飯がてんこ盛りにされる。

「あー、そんなには食べられないですよ」

「だからチビなのよ。頑張って170センチを超えなさいよ」

19歳。育ち盛りの時代は通り過ぎていて、今から大食いになったところで身長168センチはもうどうしようもないと思うんだけど。

(野沢 尚「反乱のポヤージュ」)

3-6 攻撃的意図による肯定的評価 (E)

ほめることによって相手を不快にする発話で、いわゆる「ほめ殺し」である。

- ①聞き手の心理にマイナス方向に影響を与えることを期待して、 [発話意図=-]
- ②聞き手に属する＜何か＞について肯定的な評価を伝えようとして、 [伝達内容=+]
- ③肯定的な評価を述べる [発話内容=+]

2章に述べたように、伝達内容、発話内容の点では「親和的意図による明示的肯定的評価」(A)と同じであり、形式上この2つを区別することは難しい。例7をみても、発話そのものからは、純粹にほめているのか、不快感を与えようとしているのか確定することはできない。読者は、ただ地の文(=聞き手の主観)の「厭味たっぷり」というところから判断するのみである。

[7] (「私」はかつて青函連絡船で働いていたが、2年前に転職した。その後連絡船の廃止が決まり、船員達は転職先を探しあぐねている)

「お前は賢いよ。民営化の噂が出たとたんに転職だもんな。俺たちや今ごろ慌てて、まるでギリギリみたいでねえか」

二等航海士が久しぶりに顔を出した私を覗き込んで、厭味たっぷりに口元に笑みを溜めた。

(辻 仁成「海峡の光」)

これが相手の心理にマイナス方向に影響を与えることができるのは、評価が話し手自身との比較を含んでいるからであろう。すなわち、「自分は賢く、それに比べて俺たちはバカだと思っているのだろう」と聞き手を非難しているようにとれるために、聞き手の立場を悪くする意図がとれるのである。

次に挙げるのも、ほめることによって相手を不快にしようとしているととれるものであるが、例7が劣勢にある者からのほめであるのに対して、例8は優位な立場にある者からのほめである。

[8] (主人公は「創路先生」と呼ばれる人物の秘書兼愛人である。「創路先生」と出会う前は、弁当屋でアルバイトをしながら細々と翻訳をやっていた。「創路先生」の留守中に、その妻から「退屈だから」と自宅に呼びつけられ、もてなしを受けているところである。妻は「相当なお嬢様」である)

グラスから口を離し奥方の顔を見る。可愛らしい花のような笑顔で、彼女もこちらを見ていた。

先生はこの人に私のことをあれこれ話しているのだ。まさか堂々と愛人だとは言っていないだろうが、勝手に私の事情を話されるのはいい気分はしなかった。

「そうだ、翻訳やってるんですってね。創路に訳書見せてもらったの。すごいわね。尊敬しちゃう」

全然褒められてる気がしなかった。考えすぎかもしれないが、ほんのり軽蔑さえ感じ取れる。

(山本文緒「恋愛中毒」)

これが不快に受け取られているのも、話し手と聞き手の関係からくるものであろう。相手をほめることによって心理的余裕を示し、競合関係における自らの優位性を誇示していると考えられる。ただ、これが「軽蔑」ととられるのは、大げさなほめの中に「あなたにとってそれは価値があることだろうが、自分にとってはそんなことは価値のあることではない。だから口先ではいくらでもほめてやる」という意図が感じられるからであろう。その点、この例は次に挙げる「攻撃的意図による、肯定的評価を装った否定的評価」(G)との中間的な存在といえる。

なお、2章に挙げた Verbal harassment の例も、例7、8のような「ほめ殺し」とは異なるが、「ほめることによって相手を不快にする」点では同じであるので、ここではこの分類に属するものとみなす。

3-7 攻撃的意図による、肯定的評価を装った否定的評価 (G)

否定的評価を伝えるのに、その逆の肯定的評価を述べる(=皮肉)という点では(C)と同じであるが、親密さを表す意図ではなく、攻撃として行われるものである。

- ①聞き手の心理にマイナス方向に影響を与えることを期待して、 [発話意図=-]
- ②聞き手に属する＜何か＞について否定的な評価を伝えようとして、 [伝達内容=-]
- ③肯定的な評価を述べる [発話内容=+]

[9] (「美和子」は結婚詐欺に遭った女性。「阿久津」は刑事で、「美和子」の昔の恋人である。「美和子」は、「阿久津」が詐欺の一部始終を見ていながら、捜査のために黙っていたことを、自分に対する復讐だと思っている)

「私が、何度もここに来てることも、知ってたんでしょう？知ってて、わざと顔を出さなかったのよね？さぞかし、面白かったでしょう、私が結婚詐欺師の肩を持って、あんな人のことを信じる

なんて言い続けてるのを、陰から見てたのよね」

「君の担当にならなかったのは、上からの命令だ。俺は、最初に君に会いに行ったときも、上に相談した上で、行った」

美和子の丸い顔が、ぴりぴりと痙攣したように動いている。阿久津が何を言っても、彼女には言い訳にしか聞こえないだろう。

「お見事ね。すべては、命令どおりっていうわけ。立派な刑事さんじゃない。やっぱり、向いてたんだわねえ？」 (乃南アサ「結婚詐欺師」)

話し手は「上の命令」を言い訳にする聞き手を皮肉っているのであるが、これも発話だけをとってみれば、聞き手をからかっている(＝親しみの表明)ということもあり得る。これが攻撃と受け取れるのは、話し手が聞き手に対して猛烈に腹を立てているという状況が明らかだからである。

3-8 攻撃的意図による否定的評価(H)

ストレートなほめとは正反対の、ストレートなけなしで、否定的評価を述べることによって相手を不快にしようとするものである。

- ①聞き手の心理にマイナス方向に影響を与えることを期待して、 [発話意図＝－]
- ②聞き手に属する<何か>について否定的な評価を伝えようとして、 [伝達内容＝－]
- ③否定的な評価を述べる [発話内容＝－]

[10] (いたずらで110番通報を繰り返す男に、警察官が怒って)

「てめえの暇つぶしの相手なんか、してられるか！ 淋しいんだったら、友達でも彼女でも、てめえで探せ！ それもできねえんだったら、おまえなんか田舎に帰れ！」

「いーいいのかよ、善良な市民に、そんなこと言って。いいと思ってるのか」

「てめえなんか、善良でも何でもねえよ。生っしろい、ウジ虫野郎じゃねえか。こっちは毎日汗だくになってかけずり回ってるっていうのに、てめえは働きもしねえで、何様のつもりなんだ！」
(乃南アサ「ボクの町」)

4. 考 察

2章の表1からわかるように、形式(発話内容)が肯定的評価であっても、伝達内容と発話意図の点から4通りの

解釈が可能である。すなわち、「親和的意図による明示的肯定的評価」(A)、「親和的意図による、肯定的評価を装った否定的評価」(C)、「攻撃的意図による肯定的評価」(E)、「攻撃的意図による、肯定的評価を装った否定的評価」(G)のいずれかである。形式が否定的評価の場合も同様である。3章に挙げた例からも明らかなように、これらは形式のみからでは互いに区別することは困難である。3-3の例4では、「親和的意図による、否定的評価を装った肯定的評価」(B)であるものが、第三者によってそのまま否定的評価として解釈されている。ただし、聞き手は単に形式のみからではなく、コンテキストとの整合性や、イントネーションなどの音声的な特徴、文体(ぞんざいな言い方をしたり、逆に不必要に丁寧に述べたりする)などから総合的に判断しているのであり、通常は話し手が意図したとおりに解釈することが期待できるからこそ、ストレートなほめ、ストレートなけなし以外のパターンが存在するのである。

しかし、すでに述べたように、発話が最終的に聞き手の心理にどのような影響を及ぼすかは、話し手がコントロールできることではない。プラスの効果を期待した肯定的評価の発話が、聞き手の心理にマイナス方向に影響する場合も考えられるわけである。つまり、話し手としては「親和的意図による明示的肯定的評価」(A)すなわち「ストレートなほめ」のつもりが、聞き手には「攻撃的意図による肯定的評価」(E)すなわち「ほめ殺し」と同じ効果を持ってしまう可能性もあるということである。次の例11は、それに近い例である。話し手には悪意はなく、聞き手も悪意を感じているわけではないと思われるが、聞き手は、実際以上の肯定的評価を受けることによって、不快というほどではないが、身の置き所のない心境になっている。

[11] (「マサシ」は合コンで知り合った「ハルミ」に食事に誘われた。合コンでは「ハルミ」とは別の女性に関心を持ったが、誘いには応じていっしょに食事しているところである)

食事をしながらの話は、一方的にハルミのペースで進められた。女性がしゃべるのを聞いているのは嫌いじゃないので、マサシは、

「ふんふん」

とうなずきながら食事をしていた。彼女はどうかしたら将来、マーケティング部の部長になれるかということを、熱心に話しつづけていた。

「そういうふうに、ちゃんと話を聞いてくれる男の人って、なかなかいないのよね」

うっとりした目で、彼女はマサシを見た。

「えっ」

「あなたって、本当に優しい人だわ。ハンサム

じゃないんだけど、女性を安心させる雰囲気をもっているわね」

「…」

気恥ずかしくなったマサシは、何もいわずにワインをがぶっと飲んだ。

(群ようこ「へその緒スープ」)

このように、ストレートなほめ(A)は、意図せぬところでほめ殺し(E)に転じる危険性をもつ。

「暗示的肯定的評価」(A')や「否定的評価を装った肯定的評価」(B)が存在するのは、実はそのためであると考えられる。これらは、「親和的意図による明示的肯定的評価」(A)とは[発話内容]が異なる(0または-)が、[伝達内容]および[発話意図]は同じ(+)である。これらは、いずれも[伝達内容]さえ汲み取ることができれば(実際には肯定的評価をしているのだということがわかれば)、攻撃を意図していると受け取られることはない。表1からわかるように、「暗示的肯定的評価」にも「否定的評価を装った肯定的評価」にも、「攻撃的意図」によるものは存在し得ないからである。つまり、これらは、「ほめ殺し」(E)をする危険性を回避しつつ肯定的評価を伝えるためのストラテジーであると考えられる。

5. まとめと今後の課題

本稿では、ほめやそれに隣接する言語行動について、「発話意図」と「伝達内容」と「発話内容(形式)」の3つの軸で整理・分類し、それぞれの位置関係の捉えなおしを行った。その結果、今後ほめについての研究を進めていく上で、「ほめ」や「けなし」が額面どおりに受け取ることができないようなケースをどのように取り扱っていくべきかが明らかになったと思う。

しかし、「ほめ殺し」(E)のような言語行動がなぜ存在するのか、また、ストレートなほめがなぜ相手を不快にし得るのか、そのメカニズムは明らかにされていない。本稿に挙げた例からも、「ほめ殺し」にはいくつかの下位分類が存在するように思われる。それが、ほめが不快感につながるメカニズムを解明する手がかりになるであろう。この点については、別の機会に述べたいと思う。

＜主要参考文献＞

- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. 1978. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge university press
- Herbert, Robert K. 1990. Sex-based differences in compliment behavior. *Language in Society* 19.
- Holmes, Janet. 1988. Paying compliments: A sex preferential

politeness strategy. *Journal of Pragmatics* 12

Holmes, Janet. 1995. *Women, men, and politeness*. : Longman

Manes, Joan and Wolfson, Nessa. 1979. The compliment formula. *Conversational Routine*. Coulmas, F(ed) : Mouton

Manes, Joan. 1983. Compliments: A mirror of cultural values. *Sociolinguistics and Language Acquisition*, Wolfson, N and Judd, E(ed) : Newbury House

Pomerantz, Anita. 1978. Compliment responses: Notes on the co-operation of multiple constraints. *Studies in the organization of conversational interaction*, Schenkein, J(ed) : Academic Press

Wolfson, Nessa. 1983. An empirically based analysis of complimenting in American English. *Sociolinguistics and Language Acquisition*, Wolfson, N and Judd, E(ed) : Newbury House

ジェフリー・N・リーチ. 2000. 『語用論』(原著、1983年) 池上嘉彦・河上誓作訳 紀伊国屋書店

大野敬代. 2004. 「待遇表現としての「ほめ」の特徴について—シナリオ「釣りバカ日誌」を手がかりに—」『留学生教育』第6号 埼玉大学留学生センター

川口義一・蒲谷宏・坂本恵. 1996. 「待遇表現としてのほめ」『日本語学』第15巻5号

熊取谷哲夫. 1989. 「日本語における誉めの表現形式と談話構造」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究(二)』広島大学教育学部

因京子. 2005. 「日本語学習者の日本語会話解釈上の問題点—日本語学習者によるマンガ理解を通して」『比較社会文化』第11巻 九州大学大学院比較社会文化学府